

【研究資料】

PBL「アカデミック・ライティング」の実践例と旧必修 「教養セミナー」との比較†

福田 知子*

三重大学教育推進・学生支援機構全学共通教育センター*

R4 年度まで初年次後期必修であった「教養セミナー」が選択科目 PBL「アカデミック・ライティング」となって 2 年目となる。そこで現在の授業活動について報告を行うとともに、かつての必修科目が選択科目に変わったことによってもたらされた影響・効果や、今後の展望について、担当教員の個人的視点から考察した。選択制になったことで登録人数が減少し一部プログラムの変更が必要になったものの、読み書きに関心のある学生が集まることで授業が活発になり、一部で満足度も上がった。一方、読み書きに関心の無い・嫌いな学生はそもそもこの授業を履修しないと思われることから、「教養セミナー」が担ってきた役割を PBL「アカデミック・ライティング」でカバーすることは難しいと思われる。今後、一年次の学生に「読む」「書く」に触れる機会をどのように作っていくかが課題になると考えられる。

キーワード：教養セミナー、アカデミック・ライティング、批判的読解、書く力、グループ学習

1. はじめに

PBL「アカデミック・ライティング」がスタートしてから 2 年目となる。この授業は令和 4（2022）年度まで行われていた一年次必修科目「教養セミナー」の後継授業である。

「教養セミナー」は「読む」「書く」能力を育成することを目的として、前期の「スタートアップ PBL セミナー」で培った「聞く」「話す」能力と統合し、知的コミュニケーション力の獲得を目指した授業であった。しかし、カリキュラムの再編成に伴い必修科目から選択科目になり、令和 5（2023）年度からは「教養セミナー」の専任担当だった各教員で PBL「アカデミック・ライティング」を担当し、授業テーマとして各教員の専門分野を含めることで「教養セミナー」を引き継ぐことになった。この年度以前に「教養セミナー」を受講して再履修が必要になった学生は、PBL「アカデミック・ライティング」を受講することで単位として読み替えられる。

「教養セミナー」は教養教育院が設立された 2015 年から開始され、初年次の学生に対して今後の学習・社会生活にとって必要となる「読む」「書く」という能力を開発する上で、大学教育の土台となる授業の 1 つであった。その運営体制については、教養セミナー部会で授業

内容を検討し統一した綿密な授業運営を行っていること（三重大学教養教育院記録誌編集室 2022）、授業の内容については、本を読む機会、書く機会となる以外にも、異なる関心を持つ学生同士が互いの読みを相互批判することで、より客観性の高い「読み」の作法を身に付けることを目指す授業である（同上）など高い評価を受けていた。

本授業が「選択科目」に移行したことで、本授業は「すべての学生が受講する」授業ではなくなり、授業の性格も変化することが予想される。しかし、7 年間を通じて「教養セミナー」が目指した内容は今後、形は変わっても引き継いでいくべきであると考えられる。そこで、現在 PBL「アカデミック・ライティング」を担当する教員の一人として、この授業の現状を報告し、将来的な授業の在り方を考えたい。

2. PBL「アカデミック・ライティング」の現状報告 2.1. 授業内容

「教養セミナー」の後継授業として、本授業では、「教養セミナー」が目指した目標を引き継いでいる。①本を読む機会を作ること②批判的に読む訓練を行うこと③自分の意見を説得力を持って伝えられるように書くこと④他

表 1. 新旧プログラムの比較

	教養セミナー		アカデミック・ライティング（福田）	
	講義	演習	講義	演習
第1回	ガイダンス・班分け・自己紹介		ガイダンス・班分け・自己紹介	
第2回	授業の背景、レポートの書き方		授業の背景	
第3回	書評とは、新書とは		読書の対象、書評について	
第4回	主題の把握	読み合わせ（1回目）	要約の方法	読み合わせ（1回目）
第5回	要約の仕方	読み合わせ（2回目）	批判的読解	読み合わせ（2回目）
第6回	批判的読解	読み合わせ（3回目）	書評の構成	読み合わせ（3回目）
第7回	書評を書くための新書の選定	ビブリオバトル	前半の総括	ビブリオバトル
第8回	読書計画の立案		書評を書く視点1	
第9回	読みあわせと書評作成1	読み合わせ（1回目）	書評を書く視点2	読み合わせ（1回目）
第10回	読みあわせと書評作成2	読み合わせ（2回目）	論評部を書く1	読み合わせ（2回目）
第11回	読みあわせと書評作成3	読み合わせ（3回目）	論評部を書く2	読み合わせ（3回目）
第12回	書評の作成	書評の作成	書評の書き方まとめ	2冊目のまとめ
第13回	書評の校正	書評の校正	書評の校正	初稿の査読
第14回	書評の評価・査読	書評の評価・査読	書評の評価・査読	修正稿の査読
第15回	総括・アンケート		総括・アンケート	最終稿の査読

のメンバーと論評し合い文章の改善を行うこと、である。「教養セミナー」では教養セミナー部会の話合いに基づいて授業内容を決定・変更し、共通のスライドを使用することで授業の統一性を保っていた。また、専用読書シートの一斉回収、学生同士の相互評価のデータ出力、提出された書評の専用ソフトによるチェックなど、システム面の処理も充実し、多くの学生の学習内容・成果を把握しやすい状態であった。これに対し、現在ではこれらの枠組みは廃止され、指導・評価の方法などは個々の担当教員にほぼ任されている状況である。

授業の内容は、報告者の PBL「アカデミック・ライティング」では「教養セミナー」の内容をほぼ踏襲し（表 1）、その骨組みの部分は現在の PBL「アカデミック・ライティング」でもそのまま取り入れている。特に、講義と演習を組み合わせた授業方法、第 1 回の本の紹介、第 7 回のビブリオバトル、前半・後半に一冊ずつ新書を読む方式、書いた書評の学生同士の査読などは、現在の授業でも中心的な活動内容となっている。その他、報告者が独自に行っている内容として、毎回、過去の優秀書評集から取り上げた書評を読み、紹介部・論評部の書き方を解説したり、改良点を考えたりする機会を設けている。書評については第 13 回、遅くても第 14 回には全員が提出することとし、他のメンバーからの査読を受けない限り合格と認めないこととしている。

2.2. 受講者数

必修科目が選択科目に変わった際の最も大きい変化は

受講生の数である（表 2）。PBL「アカデミック・ライティング」スタート時の 2022 年前期の履修者数は 2 クラスの人数がそれぞれ 4 人と 7 人であった。「教養セミナー」では 1 クラスの人数が 30～40 人ほどと安定していたのに対し、受講生の数はこれまで 4～25 人まで変化している。

登録人数が少ないことから、「教養セミナー」で行っていたようなグループワーク体制が取りにくいことが問題になっている。最も影響を受けるのはグループ内での話し合いや書評の査読などの活動である。例えば受講生が 4 人の場合、グループは 1 グループだけになり、ある課題に対する回答を話し合っても、他のグループの回答がきけないことからグループワークの効果が薄れる。また、書評の原稿をグループ内で査読することはできても、班外のメンバーと交換することができず、常に同じ班員の中での査読になってしまうという問題もある。

2.3. 受講者の内訳

受講生の内訳としては、「教養セミナー」では各クラスに 2, 3 人であった再履修生と思われる 2 年生以上の割合が高くなったことが挙げられる。1 年生と 2・4 年生の偏り方は毎回異なっており、令和 6（2024）年度前期の 2 クラス中 1 クラスは 4 人全員が 2・4 年生であった。一方、令和 6 年後期の 2 クラス中 1 クラスは 18 人中 14 人が 1 年生であった（表 2）。

選択制になったことから、1 年生を中心に「読む」「書く」ことに対しあまり抵抗感を持たない学生が受講している傾向がみられる。1 回目の授業で自己紹介を兼ねて

表 2. 2019年度から2024年度までの受講者数の年度ごとの集計と内訳, UNIPAによる授業満足度

年度	前期/後期	科目名	受講者数	受講者内訳	UNIPA授業アンケート			
					1年生	2-4年生	回答人数	満足度 標準偏差 (SD)
2019	後期 (6クラス計)	教養ワークショップ	203	—	—	—	157	4.03 0.250
2020	後期 (6クラス計)	教養セミナー	213	—	—	—	129	4.02 0.240
2021	後期 (6クラス計)	教養セミナー	200	—	—	—	118	4.17 0.242
2022	後期 (6クラス計)	教養セミナー	204	—	—	—	108	4.40 0.167
2023	前期 (2クラス計)	アカデミック・ライティング / 生物学	11	7	4	—	7	4.75 0.354
2023	後期 (2クラス計)	アカデミック・ライティング / 生物学	40	5	35	—	18	4.00 0.424
2024	前期 (2クラス計)	アカデミック・ライティング / 生物学	26	18	8	—	18	4.60 0.141
2024	後期 (2クラス計)	アカデミック・ライティング / 生物学	43	25	18	—	—	—

「これまで読んできた本」を紹介する場面では、教養セミナーでは「漫画、ラノベも可」として多くの学生が漫画の紹介をしていたのに対し、小説や歴史など漫画以外の本について紹介する学生が多い印象であった。また、Moodle に提出された原稿は教員が早い内に通読しコメントを返しているが、改訂前の初稿の段階でも「教養セミナー」でよく見られたような誤字脱字などが少なく、文法から逸脱した文章もあまりみられなかった。一方、2年生以上の学生については真面目に出席している学生が多く、文章力に問題がない学生が多い。しかし、一部で授業の出席が少なく、書評の提出が遅れるなどの問題も生じている。書評を提出しない学生の中には、どうしても書けない学生も居るようであり、個人的に指導を試みているが、連絡が取れないなど上手くいっていない。

2.4. 担当教員ごとの専門分野の指定

PBL「アカデミック・ライティング」が担当者ごとの授業となったことから、授業テーマとして担当者ごとの専門分野を付加している（報告者の場合、生物学）。当初は学生の読む本を生物学に限ったが、生物学を全く学んだことのない学生にとっては正しく読むことが難しいと感じたため、すぐにこの制限を取りやめた。現在は、論説文であれば幅広い分野の本を選択可としている。

3. 授業改善のポイント

3.1. 授業プログラムの調整

アクティブ・ラーニングを目指したグループワークを中心とした授業において、受講人数が少ないことはプログラムに影響する。大人数だとシステムとして行えることも、少人数の場合、円滑な運営が難しくなる。特に、大人数の場合は消極的な苦手の学生がいたとしても他の学生が主導することでグループワークが成立することが多いが、少人数の学生の中にグループワークが苦手な学生が数人居る場合はグループワークを成立させること自体

が難しくなる。

そこで、従来のプログラムのグループワーク部分を、学生の人数が少ないクラスにも対応できるように運用している。例えば、グループワークに教員が参加したり、議論が難しい場合は教員との直接対話に切り換えたりしている。また、書評提出前の査読についても教員がアドバイスを書きこんだりすることで、学生同士の査読の機会の不足を補っている。

グループワークがやりにくいことによって、授業が目指す効果の中でも②批判的に読む訓練を行うこと④他のメンバーと論評し合い文章の改善を行うことという重要な側面が弱くなる。そこで、これらの点については可能な限り授業内容でカバーするように考えている。具体的には、毎回読む書評の中で、どの点が良い・良くないか、どのように改善できるかを考えたり、ある実験映像で行われる実験内容の不備などの批判を行ったりするなど、「批判的に考える」機会を作っている。特に、第8回・9回では「書評を書く視点」をテーマに、一冊の本について書かれた2つの書評を比較しながら読むことによって、書評を書く場合に複数の視点があり得ることを納得できるようにしている。さらに第10回・11回では学生が書いてしまいがちな書評（論評者の見解が少ないケース、書きたいことが絞り切れていないケース）を読んで、どこが問題か、どうすればいいかを全員で考える機会を設けている（表1）。

3.2. 授業運営の方法

「教養セミナー」が一年次の学生全員に対する必修授業であったという性格上、授業担当者による内容の違いが無いように統一されていたことと比較すると、PBL「アカデミック・ライティング」は授業担当者ごとに内容を任される形であるため、これまでより柔軟な授業運営が可能である。

「教養セミナー」では前半・後半にわたって計6回の読



図 1. グループでの読み合わせ。各自が読んできた本を 5 分間で紹介する。

書シートの提出を課題としていたため、学生にとって負担の多い授業であった（井口，2017）。このような要件は学生全員が参加する必修授業でこそ成立したと考えられ、学生の自習時間を増やすのに役立っていたであろう。しかし、多くの学生は専門関係の授業（数学、物理、語学など）の学習に時間を割く必要があり、たとえ読書が好きな学生でも、選択科目においてこのような負担の多い授業を好んで取る学生は少ないであろうと思われる。そこで、本授業では読書シートの書き方を説明して、その効果（後でどこに書いてあったかがわかる、自分の感じたことをその場で書いておける）を伝えた後、提出は不要としている。実際の授業での様子をみると、グループ内での本の読み合わせの時に紙やスマホに書いたメモ書きを見ながら内容説明をしている学生が半数ほどみられる。

授業運営において学生の意見を取り入れることも試行中である。例えばグループワークの班構成については、「教養セミナー」では教員が決めたグループで授業を全期間行うという方法であった。それに対し、現在は毎回のクラスでの学生へのアンケートに基づき、「前半は固定、後半は毎回ランダムに変える」「前半、後半はそれぞれ固定、メンバーは前半、後半の初めにくじで決める」などその都度異なる方法で行っている。班活動については安定した活動のために「固定すべき」という意見もあるようだが、班のメンバー構成を変えて異なるメンバーと話すことで得られる利点もあると思われる。さらにビブリオバトルのやり方、本の選び方などでも、授業の方法に主体的に関与できるようにすることで、学生に授業への積極的参加を促している。以上のような運営を通じて、学生が遠慮することなく意見を出し、互いに活発に議論できるような下地をつくることを目指している。

4. 考察

「教養セミナー」が必修でなくなったことで、同じプログラムを行っていても授業の内容が変化したとを感じる。一つには、内容にある程度の関心を持つと思われる学生が選択的に履修するようになったことである。「教養セミナー」のよく練られたプログラムを受け継ぐことで、PBL「アカデミック・ライティング」は読解力・文章力をつけたい人にとって取り組みがよい内容となっており、教員側も意欲を持って授業に取り組んでいる。UNIPA のアンケートによる授業に対する満足度は 4.00～4.75 であり、教養セミナーの時の満足度（4.02～4.40）と同様かやや上回っている（表 2）。一部の再履修の学生に対しては問題を抱えたままではあるが、受講人数が少なくなったことで、一人一人の学生に対して目が届きやすくなった印象がある。

一方、読書や作文が特に好きではない多くの学生にとっては、「教養セミナー」の持っていた「みんなで助言し合って少しずつできるようになる」方法が親切であっただろう。教養セミナーの膨大なアンケートの回答の中から目を引いたのは、以下のような回答であった。

- ・はじめは書けるはずはないと思っていたので書評を書き終えた時には達成感でいっぱいになった。
- ・今まで人の考えを批評するのが怖かったが、相手のために助言できるようになった。
- ・読み書きが苦手だったが、授業回数を重ねていくうちに文章を要約する力や読む速度が上がっていくのが感じられ前向きに取り組めるようになった。

（以上、2020 年度の授業の振り返りアンケートより）。

これらの回答と並んで、「本を読む機会が得られてよかった」という感想が多く並んでいた。アンケートのような学生がすべてではないと思うが、授業を「仕方なく」取られた結果、取りあえず本を読んで書評を書けたことを



図 2. 例題の書評の改善点についてグループで話し合う。

良かったと思う学生が多くみられたことになる。

PBL「アカデミック・ライティング」はまだ2年目の科目であるが、今後、他の先生や学生の意見を聞きつつ試行錯誤しながら良い授業に育てていきたいと思う。一方、「教養セミナー」が多くの学生に届かない授業になってしまったことは残念である。半年間だけでも2冊の本をじっくり読んで自分の意見をまとめた経験があれば、将来、卒論や小論文などさまざまな機会を自ら乗り越えられるだろう。今後は学生にすべての学習の基礎となる「読む」「書く」に触れる機会をいかに作っていただけるかが大学教養課程としての課題になると考えられる。

参考文献

井口靖 (2017) 機構長だより(2017年9月28日)

https://www.ars.mie-u.ac.jp/director_blog/post_33.html (2024年10月29日)

三重大学教養教育院記録誌編集室 (2022)『三重大学教養教育の軌跡—理念・カリキュラム・組織—』三重大学教養教育院, 189-280.

SUMMARY

This is the second year since “Kyoyo (Liberal Arts) Seminar,” which was required in the second semester of the first year until the R4 academic year, was succeeded by an elective course called “Academic Writing. This paper reports on the current class activities and discusses the effects of the change from a required course to an elective course, as well as future prospects from the personal perspective of the faculty member in charge of the course. Although the number of students enrolled in the elective courses decreased and some program changes were necessary, the classes became more active as students interested in reading and writing gathered, and some students were more satisfied with the classes. On the other hand, it is difficult to cover the role of “Academic Writing” with the “Kyoyo (Liberal Arts) Seminar” because regular students and students who dislike reading and writing are not likely to take this class in the first place. The question that needs to be addressed in the future is how to create opportunities for general students to experience reading and writing.

KEYWORDS: “Academic writing”, critical reading, group learning, “Kyoyo (Liberal Arts) Seminar”, writing ability

† FUKUDA Tomoko * : Practical Examples of PBL “Academic Writing” and Comparison with the Former Required “Kyoyo (Liberal Arts) Seminar”

* Organization for Education Development & Student Service, Center for General Education, Mie University, 1577 Kurimamachiyacho Tsushi, Mie, 514-8507 Japan